

久保利英明の グローバル彷徨



第6回

ユーゴの解体とコソボの復活

イラスト・題字：長峯亜里

島国で国境線が比較的明解で、ほぼ単一民族・単一言語で、宗教間の争いの少ない日本の対極にあるのがバルカン国家群である。これほど歴史の冷酷さと人間の強さを教えられる地域は他にない。

第1次世界大戦は1914年、サラエボでのボスニア生まれのセルビア人によるオーストリア皇太子暗殺事件が発端である。ユーゴスラビアの崩壊とセルビア・コソボ問題は、イスラム過激派組織ISやパレスチナ問題を考える上で、重要な示唆を与える。国が戦争をつくるだけでなく、戦争が国をつくるのである。

バルカン半島と旧ユーゴスラビアの国々は現在11カ国ある。ユーゴスラビアはかつて「7つの国境、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字、1つの国家」と呼ばれていた。6つの共和国とはクロアチア、スロベニア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニア、モンテネグロである。他の4カ国は、アルバニア、ギリシャ、ブルガリア、ルーマニアである。最後の1カ国は2008年に独立宣言をしたコソボとなる。今回は14年8月に訪れたこのコソボを取り上げる。

「コソボ共和国」はいまだ国連に加入せずEUにも加盟していないが、世界111カ国が承認し日本国も承認しているから、国とみなしてよいだろう。

物価の安さと粗末な露店

そもそもコソボにはコソボ人と呼ぶべき民族はいないし、コソボ語もない。公用語はアルバニア語とセルビア語である。アルバニア人が92%、セルビア人が5%という人口構成で、アルバニア人はイスラム教徒が多く、セルビア人はキリスト教の一派であるセルビア正教の信者である。

コソボの町を歩いていて驚いたのは、物価の安いことと道ばたの露天で売っているものの粗末なことである。多いのはトウモロコシを焼いて食べさせる屋台である。パリにも焼き栗はあるが、このトウモロコシたるや^{しな}萎びて小さく、おいしくないのである。秋になったら焼き栗に替えるのかもしれないが、2本1ユーロ(約125円)でもいただけない。外国たばこを子どもが売りに来る。これも1箱1ユーロ、ライターは0.3ユーロ(約40円)。まともな輸入ルートとは思えない。コソボは鉱物資源が豊からしい。そのためか露天でキラキラ光る鉱物の原石を売っていた。ひとかけら500円くらいだが、よその国ではめったに見ないお土産である。

セルビア発祥の地を巡る激しい争い

セルビア国はコソボの地で誕生した。コソボはセルビア王国およびセルビア正教の中心であっ